

---

# リアル・・・こっくりさん

カービー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リアル・・・こつくりさん

### 【Nコード】

N6285A

### 【作者名】

カービー

### 【あらすじ】

はしもとしょう みやもとあきな さとうひかる いしだまり  
橋本翔、宮本明奈、佐藤光、石田真理の仲良し4人組は翔の小屋に古くから置いてあった「こつくりさん」を遊び半分で始める。だが、こつくりさんを始めたことにより……4人は最悪な危機へと向かい入れられることになる。

## プロローグ

全ての始まりわ

僕たちが始めてしまった

学校の屋上で行われる

こっくりさん

今はこっくりさんブームじゃないが

盛り上げるためにしてしまった

そこから全ては始まった

## 第1話：「運命の始まり」

俺の名前は橋本<sup>ハシモト</sup> 翔<sup>ショウ</sup>

今年高校2年生になる。

今は春休み……。

学校はもあとすこしで始まる。

「翔ー君！」

後ろから驚かしてきたのは俺の女友達「宮本 明奈」(ミヤモト アキナ)だった……。

「何でいるんだろよ！」

俺はビックリした……怖い小説を本屋で立ち読みしていたから。

「それは、あたしのセリフだよー、あんまり暇かったから来ただけ、何よんでるのー？あ、こっくりさん！あたしもスキ！ワクワクするよね」

そんな明奈を見た俺は……いいことを思いついた。

「そうだ！一緒にコッくりさんやらねえ？」

明奈も俺の誘いにつてくれた。

「いいよいいよ！！でもさ、するなら大勢でした方が良くない？」

そこで何人が誘ってみた。

「2人くらい誘った！くるってさ！」

俺がそういうと明奈は楽しそうにしている。

「あ！俺さ、この前家の小屋で変なの見付けたんだよ、でも、暗く見えなかったから放置したんだけどさ、アイツ等来たら、俺の家ついてきてくれない？」

「いいよいいよ！」

明奈の顔はとても嬉しそう……。

怪談とか、そういう系の話がすきなんだろう。

「翔ー！ヤッホ！」

佐藤<sup>サトウ</sup> 光と<sup>ヒカル</sup> 石田<sup>イシダ</sup> 真理<sup>マリ</sup>が来てくれた。

明奈が事情を説明する。

「ほんじゃ、小屋に行こうか！」

そう言っただけで着いた小屋。

「あ、あったあった！」

俺は見付けた本を手取る、明奈と光と真理もホコリを叩いてくれた。

本の題名は……偶然にも

” こっくりさん ”

「こっくりさん」

俺と明奈と光と真理は一声に声を出した。

しかも「こっくりさん」の本は今現在出版されているのではなく、結構古い。

本を開いてみると「コックリsanの遊び方」などと書いてある……。

次のページをめくってみると「あなた達の役目は終わりました」と出るまで、毎日、毎日コックリsanをしなくてはいけないと……。

俺達は笑った。

だって、こんなのウソにきまってるもん。

そう思っていたのに……。

それはウソじゃなかったんだ。

「こっくりsan」

本を読むだけで終わればよかったのに……。

俺たちは、馬鹿なチャレンジャーだから、してしまった……。

運命をかえるともしらずに



## 第2話：「招かれた図書室」

「ねね、おもしろそう！こっくりさんしてみようよ」

先に言いだしたのは、真理だ……。

「おもしれー！俺、こういうのスキかも」

次に言い出したのは光。

俺と、明奈は同じタイミングで

「決定！」

と口にした。

誰かが止めていればよかったものの……。

「何処でする？」

俺は興味津々で聞いてみた。

すると、明奈が本をハンカチで拭きながら……

「学校は？」

迫力あるなあ！学校！いいかも、面白そうだし。

「ほんじゃ、夜に集合な！」

光は、人一倍怖いのが好きな男……。

それに、明奈も真理も乗って

夜に「こつくりsan」をやることになったんだ。

時間は9時・・・学校の校門前に集合。

夜！……俺たちは、校門前に集まった。

「こつくりさんドキドキするね」

楽しそうにしている、真理と明奈。

そして、今……校門の前が開かれる。

「何処の教室でする？」

真っ暗の中で、仲間があんまり見えないまま俺は皆に聞いた。

「ってか、皆いるかよ？返事しろー！翔います」

すると……

「明奈います！」

「光います！」

「真理いまーっす！」

どうやら皆いるようだ。

「ってか、まだはじまってないんだしさ、ただの誤魔化しだって、こっくりさんなんているわけないし」

明奈はコックリさんを馬鹿にする。

真っ直ぐいつて着いた場所は

## 図書室

「図書室こわー」

俺達はびくびくしながら中に入る。

ってか、何で開いてるんだ？

まるでーコックリs a nが招待したような……そんな感じだった。

### 第3話：「あなたは誰ですか？」

「早くしようよおー！」

明奈はそう言つて、「こつくりさん」の本を開く。

「あれ？まって……ここからのページ変なんだけど紙真つ白で破る線がある！」

俺と、光と真理はのぞき込んだ。

俺はひらめいた！というか……こつ思った。」

「これって……この紙にこつくりさん書かなくちゃいけないんだよ！多分、ってか、説明書読めば早いじゃん！誰か読んでよ！」

俺は結構人任せにしてしまった。

すると、光が読み出した。

「こつくりさんの仕方」

「あゝんまで書いて、点々と丸を書いて、数字を書き、はいといいえを書いて神社の鳥居を書いたら完成、そのさいに、鉛筆か、10円玉を用意して下さい。紙は、本の紙に真つ白な紙が何十枚もあると思いますが、それをお使いになって結構です。」

注意：絶対に、10円か鉛筆を話さないで下さい。  
途中で話すと呪われます。

コックリさんをするさいには低霊がよりつきますので、ちゃんと、  
追い払って下さい。

決まり：一日一枚その紙を使って下さい、全部終わるまで、この本  
から出るコックリさんからは逃れられません。

途中で逃げ出したりすると、死の恐れがありますので、始めた時に  
は、ちゃんと、ページの最後までするようにしてください」

俺は一人でおびえだした。

「一日一枚とかイヤだし！やっぱやめようよ」

でも、真理と明奈と光は勝手に話を進めている。

俺が言いだしたんだ、俺が逃げる訳にはいけない……。

そう思い、俺もすることになった。

「毎日コックリさんできるとか楽しみー」

明奈と真理は二人ではしゃいでいる。

光は、紙に書き始めた

すると、いきなり紙が光り出した。

日付が現れた……。

2006年 4月5日 21時43分

GAME START!

「すっごー！本格的……私、コックリさんズット前したけど、こんな本格的なの始めて」

真理は興奮している。

俺はイヤイヤながら参加している。

イヤだな……。

「書き終えた！」

光は、綺麗に書き終えている。

鉛筆が近くにあった。

「鉛筆でするしかないな……」

俺は光に鉛筆をわたした。

「皆！はじめるぞ」

俺達は、鉛筆を握る。

「こっくりさん、こっくりさん……」

「こっくりさん……こっくりさん……おいで下さい」



騒いだのは真理だった

「うつせえよ、静かにしろ！俺が聞く！」

そう言い出したのは光。

「あなたは誰ですか？」



#### 第4話：「こつくりさんからの返事」

” あなたはだれですか？ ”

反応がない……。

皆は黙り込む。

「何で反応ないんだ？」

俺はぼそつと聞く。

「分かったー！誰か動かしたでしょ！誰？明奈？光？翔？」

皆は一緒に……

「動かしてないっつの！」

と答えた

こつくりさんが最初に動いてから10分が経過した。

「もう、帰ったんじゃないの？」

落ち着いている明奈が言い出した……。

明奈が言つと、なんというか、もう帰ったのかと言う感じに思えてくる。

そのとき。

ズズズズズズ……………。

”わたしはこっくりさんです”

こっくりさんが俺たちに返事をしたのだ。

「そのままじゃーん!!」

真理が残念そうに言う。

「じゃ、今度は私が聞いて良い?」

明奈が口を開いた。

「いいよ!」

俺と、真理と光は一緒に言った。

聞く前に”こっくりさん”が動き出した。

ズズズズズズ……………。

「おまえたちは絶対途中で」

泊まってしまった。

何が言いたかったんだ?

すると明奈が……

「何がおっしゃりたいんですか？」

と聞き出した。

反応がない。

「怖いんだけど！」

真理は震える声で言い出す

「それは皆一緒だ！！」

光が真理にきつく言う。

きつと皆怖くて溜まらないんだ。

光の言うとおり皆怖いんだ……。

すると。

やっと動き出した。

「こっくりさんをやめようとする」

え？

何なんだ……。

「やめねえし！」

光は強い口調で言う。

っていうか……「やめるじゃなくて、やめようとする」「って事は、コックリさんからはにげられないということだ。

真理が突然変な事をこっくりさんに聞いた

「私達は、無事家に帰れますか？」

すると

ズズズズズ……。

「おまえはかえれない」

どういうことだ？

真理は帰れない……。

## 第5話：「こっくりさんのイタズラ」

真理は啞然としている。

「だ……だれよぉ！ こんなデマしてるの」

真理は明るく笑う。

でも、俺たちの表情は真剣だった。

光がコックリさんに聞く。

「何で真理だけ帰れないんですか？ 教えて下さい」

こっくりさんはゆっくり動き始めた。

ズズズズズズ……。

「それはおしえられない」

真理はとうとう泣き始めた。

「誰よー！ コックリさんしよっていいだったの！」

俺です。

「もう、こわいよ！ 今日の所は……」

明奈が言いかけた時……。

「かえさない」

え？どういうことだ？

俺はコックリさんにおもいきって聞いてみる。

「何でかえさないんですか？」

「こうなったらみんなかえさなくしてやる」

え！？どういうことだ……。

さすがの光もおびえだした。

「こっくりさん、今日の所は帰って下さい！お願いします、帰って下さるならば「はい」の方へ移動してください」

するとこっくりさんはうごきはじめた。

ズズズズズ……。

「はい」

なんだ、かえられるじゃん！よかったー終わった！

そう言って皆はパツと手を離す。

明奈が先に図書室のドアを開ける。

「あれ？開かない……開かないよ！」

は？ちよつとまてよ！俺達は全員で開けに行く。

「開かない……誰も閉めにこなかったよな？」

俺たちは、コックリさんから”逃れられない”

叫んでも誰も来ない。

もう……こっくりさんなんて、したくない……。

「閉じこめられたのー！？」

真理はまた泣き出した。

「大丈夫だつて！」

光が真理を心配する。

本当……どうにもできない。

>>ポツン<<

あれ？何か降ってきた？

「あれ？雨漏れ？」

>>ザアアアア……<<

「ちょっと何雨漏れひどすぎ!」

図書室に水が溜まっていく。

どうにかしなくちゃ。

「窓開ける!」

俺と光は窓を頑張って開ける……が開かない。

なんでだよ!あ……携帯!

プルルルル……。

皆の携帯が一声になる。

皆誰からかかってきているか見ている。

4人とも一緒のタイミングで声をあげた。

着信は……。

「こっくりさん」





【ガチャッ】

「はい、もしもし」

向こうから声は聞こえない。

「もしもし……」

すると、とても高い声で……。

「何で、帰ってっていうの、もっと話したかったのに」

もちろん俺たちにも”こっくりさん”の声は聞こえる。

「え……」

光は言葉に詰まっている。

「返さないよ……家には返さない、どうするの？水はたまってるよ？」

皆啞然としている。

怖い……。

それより俺は一生懸命ガラスを割る。

でも割れない。

光は怖くて電話を切ってしまった。

するとまた……。

>>プルルルルルル<<

4人の携帯にかかってくる。

真理は泣きながら言い出した

「もう……ヤダ！私携帯いらない！」

続いて明奈も震える声で

「あ、あたしも」

でも、やっぱり水に携帯を落とすことはできなかったようだ。

>>プルルルル……<<

携帯は鳴りやまない。

電源を切ってもかかってくる。

「何で……かかってくれないの」

そう、かかっているのに、聞こえたのは”ごっくりさん”の声

「なんで聞こえるの？」

真理はおびえながら聞く。

周りは水が溜まる音しかない。

こつくりsanの声は携帯から聞こえる……。

俺たちはせーので携帯を開いて画面をみた。

俺たちの目に飛び込んできたのは……。

”こつくりさん”

## 第7話：「なんなんだよ、このゲーム」

「わああああー」

全員震える声で携帯を水に落とす。

水は腰まで溜まってきている。

”こつくりさん”

その素顔があまりに怖くて、俺も涙が出てきた。

血まみれの顔で、人形みたいな顔をしている。

目が緑くて、顔の色は青ざめている。

こつくりさんの髪は長い……。

そして、顔から下がない。

つまり、首も含めて肩とかがないのだ。

水に落としても、こつくりさんは喋り続ける。

「生きたいなら、終わらせて……私を消して……。」

俺達は肩が震えて何も言えない。

「ねえ、以前にもコレやった人居るけど、途中で逃げたよ……。」

逃がさなくしたら、自ら自殺しちゃったよ、笑えるね」

こつくりさんは高い声で喋り続ける。

「返事しないと、そっちに行っちゃうよ」

そう言っ図書室のドアがコンコンとなる。

>>コンコンコンコン……<<

「きゃああー！」

真理は顔が青さめていて、自殺しそうな勢いで叫んだ。

当然俺たちも……青ざめている。

「来たよ……」

ドアの向こうから聞こえるのはこつくりさんの声……。

真理は気絶しそうな感じで白目になっている。

それもそうだ、こつくりさんが来るなんて……。

開けたくない……みたくない、皆そうだろう。

明奈と光は怖いのか目をつむっている。

「あけて」

ドアの向こうから聞こえてくるのは「こっくりさん」の声……

「いやぁぁぁー」

勢いで明奈が叫んでしまった。

その瞬間こっくりさんが、ドアを開けて入ってきた……。

もちろん、携帯のこっくりさんと同じだ。

こっくりさんは不気味な笑いをしている。

「首……がないよ」

光が震える声で言う。

こっくりさんは……首がない、そのうえ顔は血まみれだ。

「きゃぁぁぁぁー」

明奈が連れて行かれる。

俺たちは引き留めようとするけど、こっくりさんの力はずよかった。

「明奈ー!」

明奈はこっくりさんに何処かへ連れて行かれてしまった。

なんなんだよ……このゲーム。



## 第8話：「恐怖の明奈」

どんなに叫んでも明奈の声は聞こえなかった。

ドアも開かない……。

ただ聞こえるのはこっくりさんの笑い声。

その時……。

ドンドン水が引いていく。

「あ、水がなくなっていく」

真理は泣きながら引いていく水を見つめる。

オレは何がなにやらだ。

光はボー然と立ちつくしている。

水はなくなり、オレと真理と光はドアを開けた。

その時……大きな鏡が出てきた。

え？ここは、入り口じゃなかったか？

何で鏡になってるんだ？

その時……。

「翔……真理……光……」

聞こえたのは明奈の声。

俺たちは急いで後ろを振り向く。

……だが明奈は居ない。

俺たちは鏡を再び見る。

そこに映っていたのは明奈だった。

血まみれで……目が緑くて顔は青ざめて、目から血をだしている、  
もちろん顔から下がない

「ワアアアアアアアア!!」

何でこんな姿の明奈が……。

鏡に映っている明奈はすぐに消えてしまった。

真理は口を開く。

「こっくりさん、こっくりさん……もし居るならば教えてください」

いきなりこっくりさんに尋ね始めた。

だが、反応はない。

「明奈をどうするんですか……」

光が次に口を開いた。

すると。

「河原……。」

こつくりさんはこの言葉を言って消えてしまった。

鏡もなくなつて入り口になったのですぐ河原に向かった。

俺たちの目にとびこんできたのは……。

血まみれで倒れている明奈だった。

俺と光と真理は明奈を起こす。

「明奈……明奈！」

だけど、明奈はぐったりした状態。

真理はすぐ脈があるかどうかを確かめる。

光は息をしているのかを確かめる。

「大丈夫、気絶してるだけ」

光はホッとしたような感じで言った。

けどこの血は何なんだ……？

服の中も血でグッシヨリ濡れていたから真理が明奈の服を脱がしている。

俺と光は恥ずかしさなんて、もうどうでも良かった。

明奈のお腹には赤い血で大きく

「今度はお前の番だ」

と書いてある。

次の瞬間……。

明奈は目を開けて白目で俺たちを見る。

「きゃあああ！」

一番最初に叫んだのは真理。

「今度はお前の番だ」

明奈はそう言って目を閉じてまた気絶してしまった。

” 今度はお前の番だ ”



## 第9話：「怒りの死」

今度は誰の番なんだ。

俺と光と真理は多分その事が頭から離れないだろう。

1時間後明奈が目を覚ました。

「明奈……」

真理が泣いて抱きつく。

明奈はボーゼンとしているがすぐに周りを見渡す。

「あ……私どうして」

全然状況が読めてない様子。

それもそうだ……。

光が今までの事を全部説明すると明奈は泣き出した。

「そんな、迷惑かけてごめんなさい」

俺は明奈を励ました。

「明奈のせいじゃないから」

俺たちは今日は解散した。

皆の身に何も無いことを無事に祈り。

こつくりさんの本は俺が持つことになった為、不安がたまらない…。

あ、そういえば、明日クラス会があるんだ……。

そう、クラスがもう変わってしまうから、最後にクラス会がある。

次の日

俺と真理と明奈と光4人揃って学校に行く。

クラス会と……こつくりさんをやらなければいけないから。

クラスの皆が教室に集まって菓子とかを広げ始めた。

さすがに俺たち4人はげっそりきている……。

その時

「キャアアアア！」

クラスの女子が叫んできた。

「屋上に……」

俺たちはすぐにかきつけた。

そこには、一人の男子生徒が血まみれで倒れている。

やっぱり、俺たちの予想は当たった。

”こっくりさん”

光は息があるか、心臓は動いているか確かめている。

「いやあああああ」

真理は座り込んで大泣きしてしまった。

「真理、私も悲しいのよ、でも……」

頑張って励ます明奈。

俺は……ただボーゼンと立ち尽くすしかなかった。

「違うの」

真理は明奈の服を強引に引っ張った。

明奈はビクリしている。

俺も、そんな真理を見てびくくりした。

何が違うんだ？

「血まみれで、倒れている人私の好きな人だったの」



え……！

俺と明奈は何も言えない。

光が大声で俺たちに叫ぶ。

「駄目、息ない……死んでる」

え……？

死んでる？

だって明奈は死ななかった。

なのに何で……。

”こっくりさん、あなたは何を考えてるんですか”

## 第10話：「いっくりさんの復讐」

明奈が涙を拭いて俺たちに口を開く。

「ねえ……いっくりさんしょうよ」

光も頷いた、俺は正直迷っている……真理はズット下を向いたままだ

その時

>>ブルルルルルルル……<<

また4人の携帯がなり始める。

次は光が電話に出た。

「……何ですか」

すると、いっくりさんの先程の怒った声は無く、高いいつもの声だった。

「何してるの？ 何でズット真理はそこに座ってるの？」

真理は体事ピクッと動いた。

俺たちにも緊張が走る。

「今からしようと思ってたんです」

光がそういつとコックリさんはグズグズと言わせ始めた。

泣いてるのか？

「早くしてつて、どうなつても知らないよ？」

こつくりさんは泣いているのは笑っているのか分からない。

俺たちはただこつくりさんの言葉をジツト聞くしかなかった。

「もう……やめたいです、イヤです」

光がいきなり泣きながらこつくりさんに言い出した。

そうすると電話がいきなり切れた。

やめられるのかな？

そんなはずないのに……

少しでもそう思ってしまった。

すると次の瞬間

「おえ……………」

光がいきなり口から大量の血を吐き出した。

「光！」

どういう事だよ……またコックリさんなのか？

俺は走ってコックリさんの本を持ってきた。

こつくりさんの本を屋上に広げようとする。

でも開かない……。

「あれ……開かない」

俺は、おもいつきり本を広げようとするが鍵がかかってるみたいに本は強く閉じられている。

明奈手伝ってくれた……がやはり開かない。

一番最初にこつくりさんをした場所は図書室。

図書室に行けば良いのか？

そう思っただ俺は皆に図書室に行くように指示した。

光も運んで図書室に向かった。

図書室に足を運ぶ……だが、気があまり進まない

光の血は少し止まりはじめた。

一体なんだったんだ？

そう思いながら本を開ける。

「開いた!!」

真理は嫌な顔で言った。

できれば開いてほしくなかったが、やらないと殺される……。

俺たちはこつくりさんを書いていく。

日付も表示された

皆は一本の鉛筆を握る……。

「こつくりさん、こつくりさん……おいで下さい」

こつくりさんは動き出した

ズズズズズズズズ……。

「まだ何も」はい」の方向に言って下さいって言ってないのに」

明奈が不安そうに俺たちに言う。

こつくりさんは待ってましたとばかりに早く進む。

もう、俺たちがワザト動かしているなんて思えない。

俺たちは、こつくりさんを見てしまったんだから。

こっくりさんが本当に存在している……。

そう思うと涙が出るほど怖い。

” な に や っ て た の ”

真理は好きな人を殺された悲しみから口を開いて叫んだ。

「何で殺したりするのよ……何でよ！」

するとこっくりさんはまた動き始めた。

ズズズズズズ……。

” お ま え た ち が し な い か ら だ ”

俺たちはコックリさんの行動にイライラが増す。

「光を治してよ！ 光を治してよ！」

明奈も泣きながらこっくりさんに叫ぶ。

ズズズズズズ……

” き が む い た ら ”

俺はついにぶち切れてしまった。

「何が気が向いたらだよ！早く治せ！」

ズズズズズズ……

”きょうはこれでおわりにする”

俺たちは怒りが積もっていた。

あまりのこっくりさんの発言と行動に胃が潰れそうだ。

「帰るなら”はい”の方向へ行かれてください」

俺はムスっとしたような感じで言った。

すると。

ズズズズズズ……。

再び鉛筆が動き始めた。

え、何でだ！？

”こんどはおまえだ”

そしてこっくりさんはゆっくりと”はい”の方へ進んだ。

俺たちは不安と怖さと怒りで終わった後も何も言えない。

すると物音が激しく聞こえる。

>>ガガガガガ……<<





## 第11話：「消えない憎しみ」

俺たちは一步も動くことができなかった。

怖い……。

何で窓に赤い血がついた手が何個もあるんだよ。

手から下が無いのかな？

そう思つて俺は窓の下をのぞき込んだ。

「翔ー何やってんの、危ないよお」

明奈は俺を心配してくれる。

俺は暗くて良く見えなかったので、もういつかいのぞき込む。

すると

こつくりさんの顔がすぐ目に入った。

「ウワアアア！」

俺は叫び見るのをやめて後ずさりしてしまった。

何でこつくりさん……手があるんだよ。

顔だけだったじゃないか？

ずっと顔だけだとももっていたのに……。

俺は勇気を振り絞って、赤く血がついた手が全体にある窓をもう一度見渡した。

そしてもう一回下を見てみる。

こつくりさんの姿はなかった。

でも……この窓全体に何個もある手はなんだ？

こつくりさんじゃないのか？

そう思っていた時

手が窓を突き抜けて真理の首を強く絞め始める

「く……………るし……………い」

真理は泣きながら出ない声をおもいきり出そうとする。

すると、残りの手もドンドン中に入ってきた。

俺たちの首を強く絞める。

苦しい……………！

もう、イヤだ！

俺たち4人は首を絞められたままだ。

すると

明奈がつり上げられた状態に上に持ち上げられていた。

このままじゃ明奈が死ぬ！

「明……菜」

俺は苦しい首の痛さを押し殺し、聞こえるか聞こえないかの声を一生懸命出した。

本当に苦しい

この手の握力はいくつあるんだというくらいに。

その時

誰かの遠い声で叫んでいるのが聞こえた。

「キヤアアアアア！！」

俺たち4人は廊下の方を見た

廊下の方から聞こえてくるから

何故かだんだんこっくりさんの手の握力がなくなっていく。

あれ……？

明奈はドサッと倒れ込んでしまった。

真理も光も倒れ込んでいる。

「死ぬかと思った……」

光はゲホゲホと咳をして涙を流しながら皆に言う。

俺も、死ぬかと思ったよ

明奈も何とか大丈夫そうだった。

俺たちはゆっくり顔をあげ血のついた窓をみる……。

するとそこには。

こつくりさんの顔が映っていた。

俺たちは怖くて声も出ない。

「邪魔が入ったから今日はこれで終わりにしてあげる」

そう言っただけで消えてしまった。

” 邪魔が入った？ ”

俺は感づいて廊下の方へ猛ダッシュで走る。

「翔、どこにいくのよー!!」

俺は真理の言葉を見殺したまま廊下に出た

何故か窓につり下がっているのは女の子……

あれ、優!

優は確か光の妹だ……。

「助けて!」

そう言われ、俺は優を助けようと思い手をだした……。

下を見てみると手が優の足を掴んでいる。

”死”へと連れて行くつもりだ。

”大切な人をころしていく……”

「助けて……」

光の妹優は、震えた声で俺に助けを求める。

俺は図書室まで聞こえる大きな声で叫んだ。

「光ー!」

すると光はすぐに廊下にやってきた。

「どうし……」

光は言葉を言いかけて優を見る。

その場に固まってしまった。

明奈と真理も廊下に出てきた。

「なにやって……あれ？優ちゃん！」

真理は驚いた様子を見ている。

そりゃそうだ……。

光の妹が窓につり下がっているんだから。

光は優の手を持ち引き上げながら涙を流す。

「何で……優……」

俺も優の腕を掴んで引き上げようとする。

だが、優の足に捕まっている手が優を引っ張る。

優は泣きながら光に答えた。

「お母さんが戻ってこいって言ってたから、迎えにきたの廊下歩いてたら窓の外からいきなりスルって赤い血が染まった」

手が入ってきて私の髪を引っ張って、窓の外から放り投げようとしたみたい……だから窓にぶら下がって……」

そついうと何を言っているのかわからないような声で再び、おもいつきり泣き始めた。

俺たちも頑張って優を引っ張り上げる。

するとその時優の体がいきなり重くなった。

こつくりさんがぶら下がっていた……。

こつくりさんは俺たちを悲しい目で見つめる。

「何でこつくりさんが……」

真理が泣きながら俺に言う。

そんな事いわれたって俺も知らねえよ。

その時……優との手が俺と光は離れてしまった。

「キヤアアアアアア！！！」

「優ー！！！！」





## 第12話：「悲しみから憎しみに」

俺たち4人はすぐに優が落下してしまった場所に行った……。

優は頭を打ち付けたようで、頭から血が出ている。

「優……優！」

光は泣きながら優の体を揺らす。

「そんなに、揺らしちゃだめ！翔……救急車呼んで！」

明奈は俺に怒鳴るように叫んだ。

俺はすぐ救急車を呼ぶ。

そして、30分後……。

救急車がやってきた。

何があつたのか聞かれたが……言えない。

言っても信じてくれるはずないから。

俺たち4人は黙り込む。

時間がもつたいないからと言ってすぐに救急車の中に優を乗せて俺たちも乗り込んだ。

「優……」

光はずっと優の手を握り、呼びかける。

俺も優の手を握る。

どうか無事で！

すると、その時

4人の携帯が鳴り始めた。

>>プルルルル……<<

俺たちの額には汗が流れる。

救急車は携帯の電源を切ってなくちゃいけないから、全員切ったはずなのに……。

「どうする？取るの？」

そういう真理に反論して俺は皆に携帯の電源を切るように指示した。

俺たちは携帯の電源を切る……。

だが何故かわからないけどかかってくる。

「どうするの？　ズットかかってくるよ！」

明奈は心配そうに携帯を見る。

そして……電話の着信音が止まった。

俺たちはホットした……。

それより優だ。

優俺たちは無事であることを祈る。

そして何十分か後。

病院に到着した。

すぐ医者にみてもらったのだが。

俺たちに下された言葉は……。

「残念ながら、頭の打ち所が悪く……先程息をお引き取りました」

優が、死んだ？

うそだろ……。

俺たちはすぐ優の元に駆け寄った。

だが……目を覚ますことは無かった。

こんなにあんまりだろ

優が何した

教えてくれ、こっくりさん

そして……御葬式。

俺たちは何も言うことができなかった。

どうして……。

優がこんな。

俺たちの心を映すかのように雨が降ってきた。

>> ザアアアアアーーーーーツ<<

でも、そのまま御葬式は続けられた。

俺は後ろを振り返った。

誰かが居る気配がしたから。

すると……。

予想は的中。

黒い服に……。

血がついていない。

青ざめた顔。

それはこっくりさんだった……。

何でココに。

俺は光と真理と明奈を小声で呼んだ。

3人は後ろを振り向く。

そして真理は……。

声を押し殺して泣き始めた。

光はこっくりさんを睨んでいる。

だけど、こっくりさんは笑っている。

許せない。

生きている中で一番許せないのはこっくりさん。

俺たち4人はズットそう思い続けるだろう。



第13話：「死にたくないよ」

こつくりさん、こつくりさん……

あなたは何を考えているのですか？

俺は……いや、俺たちは……。

あなたが怖くてたまらない。

これ以上、俺達の大切な人を奪わないで。

俺たちが何をした？

優がなにをした？

こつくりさん……。

俺はいきなり気持ち悪くなった。

静かにその場を後にした

うえ……っ

洗面所で吐いている俺。

すると……。

「次はお前の番だ」

そう声が聞こえた。

こつくりさんの声だった。

鏡を見るとこつくりさんが映っていた。

こつくりさんは赤い血の涙をながしていた。

”次はおれの番……？”

葬式が終わり俺は家に帰宅した。

「キヤアアアアアア」

俺の家から母さんの悲鳴が聞こえた。

俺はすぐ家に入る。

なにがあつたんだ……。

そこに居たのは

”こつくりさん”

母さんの首を髪の毛で絞めている。

なにやってんだ！



ふざけんなよ。

(ヤメロ)

そう思い、こつくりさんの髪を引っ張る。

するとこつくりさんは俺を睨んで赤い血を目から流し始める。

う……。

床を見てみると……。

赤い血がべつとりと流れてお風呂場まで続いている。

何で風呂場？

そう思って風呂場を開けると……。

姉が風呂場につかったまま死んでいた。

そう、お湯は赤い血にそまり、姉は全身赤い血で……。

そして鏡には……。

でっかく血で

” 死 ”

とかいてあった。

洗い場も血で染まっている。

「わあああああああ！！！！！！」

なんでこんな……。

姉ちゃん！！

俺はおそろおそろ姉ちゃんの入っているお湯に行つた。

するところくりさんが何故かお湯の下から出てきた。

「わあああああ！！！！」

俺はビクリして腰を抜かしてしまった。

俺は泣きながら近づかないように手を振り払う。

怖い……。

怖い！

死にたくないよ……。



## 第14話：「こっくりさんの願い」

「早くこっくりさんしてよ……」

こっくりさんは低い声で言い俺の方に近づいてくる。

こっくりさんしても意味無いじゃないか。

皆ごろされるじゃないか。

こっくりさんをし続けたらとまるって思ってたのに……。

してもしなくても一緒じゃないか……。

「一緒じゃないかよ！俺たちを苦しませて何が楽しいんだよ！」

俺がそういうと……。

玄関のチャイムの音になる。

>>ピンポン<<

次は……。

次はなんだよ。

俺はおそろそる玄関を開けてみた……。

ドアの向こうに居たのは”明奈”だった。

何やってんだ、こんな所で。

「明奈」

俺が明奈の名前を呼ぶと、明奈は俺に抱きついてきた。

な……。

何してんだ……。

「明奈、どうした？」

明奈はいきなり泣き出した。

妹が居なくなっただの……。

は？妹が？

「さっきまで居たのか？」

「うん……」

それじゃ、はぐれたのかもしれないな。

俺はこっくりさんの方に振り向くと。

こっくりさんが居ない。

な……。

さっきまで居たのに！

何で居ないんだ……。

「こつくりさん、さっきまで居たのに……」

俺は声を震わせて言った。

だって。

居たじゃん。

何処に行っ……。

まさか！

「こつくりさん、明奈の妹の所かもしれない」

明奈はビックリして倒れかけた。

明奈の顔は見る見るうちに青ざめていく。

大丈夫かよ？

すると二人の着信音が流れる。

多分光達にも流れている。

>>プルルルルル……<<

光達がすぐ俺の家に来た。

真理は汗がとまらない状態だ。

「携帯……こつくりさんからだったから」

光は俺の家の中をのぞき込んだ。

「血」

光と真理は家の中を見てびっくりしていた。

明奈も今気づいたかのようにビクリしている。

しっかりものの光は……。

携帯から何処かへかけ始めた。

「もしもし、警察の方ですか？今殺人事件があったんです」

警察にかけ始めたのだ。

そして数十分喋り終え電話を切った。

真理は光を怖い目で見ている。

警察に電話しなきゃいけないことは皆わかっていたのだが……。

こつくりさんを思うと……。

電話できなかったんだ。

俺は家に残り状況を警察に説明することになった。

明奈達は妹を探しに行った。

俺は家の中で警察を待っていた。

すると……。

「グアアア」

外で男の人の叫び声が聞こえたので

すぐに出てみた。

え？

俺の目に入っただのは殺された警察官

何で……

まさか

こつくりさん？



俺は当たりを見渡したがこっくりさんは居ない。

でも首にしめられた痕がある。

”邪魔するな”というかのように……。

## 第15話：「消えたら誰かが殺される」

怖い……。

俺は自分の部屋からこっくりさんの本をもってきた。

この本があるから……。

こんな物いつそう捨ててしまえば。

俺はそう思い

”こっくりさん”の本を持って川に向かった。

捨ててしまえば……！

俺はそう思いこっくりさんの本を川に投げ捨てた。

本は水の底に沈んでいく。

もう

終わった。

そう思っていた瞬間。

こっくりさんが川の中から出てきた。

こっくりさんは怒っているようだ。

顔は真っ赤で血が以上に流れている。

「お前、何で捨てた」

こつくりさんは鋭い目つきで俺を見る。

だって、こんなあんまりじゃないか！

こつくりさんの声は今までに聞いたことがないくらい。

低くてかすれていた……。

俺は号泣しながらこつくりさんに呟いた。

「もうやめたかった」

こつくりさんの表情は見る見るうちに黒くなっていく。

焦げるかのように……。

「約束やぶるな」

こつくりさんは黒い肌の色で赤い血を目から流した為とても怖く感じた。

「約束？」

何のことだ

約束なんて……。

「一番最初言っただろ……おまえたちはやめようとするってでも、お前の仲間は絶対やめないと言った……嘘をついた」

こつくりさんは震える声で言いだした。

こつくりさんが拾ってきた本は水でびしょびしょに濡れている。

こつくりさんはそれを自分の長い髪で拭きだした。

「こうなる事も知ってて……やめないと言ったのだらう？」

そう言っただけでまた俺の方を睨みつける。

違う。

こうなること何てしらなかった。

しらなかったんだ！

俺は首を横におもいきり振った。

こつくりさんは俺の側に本を落として一瞬で消えてしまった。

……消えるな！

消えたら誰かが殺される

”  
コロサレル  
”

## 第16話：「最後の手段」

俺は本をひらつて濡れている本を洋服で拭いた。

何でこんな……。

姉ちゃん、母さん……。

そう思うと涙が出てくる。

帰ってきてよ！

俺はその場にうずくまって泣いていた。

返せよ、俺の大切な人たちを……返せよ！！

次の瞬間

>>プルルルルル・・・<<

だ……誰だ！

こつくりさん？

おびえながら携帯を見ると

『真理』

真理だった。

どうしたんだ？

「もしもし、真理？妹はどうなっ……」

「まだ見つかってないの、それよりテレビつけて！」

俺は真理から言われるがままにテレビをつけた。

ニュースが放送されている。

『この数日で原因不明の死亡者が増えてきています……  
原因は何なのか、警察は今……』

あれ？

画面が真っ暗になってしまった。

「真理？画面が真っ暗になったんだけど」

「私も……」

>>プープープー<<

え？

電話が切れてしまった……

何で切れたんだ……

俺はすぐ真理に電話をしようと思い携帯の番号を押そうとした時。

>>プルルルルル<<

電話がかかってきた。

真理からかな？

着信は

『こつくりさん』

額に汗が流れる。

俺は電話をとった。

「もしもし」

「今すぐ放送をやめさせる！」

こつくりさんはとても低い声で怒鳴りつける。

そんなの……。

「そんなの無理に決まってー」

言いかけた瞬間……。

テレビの画面が元に戻った。



” 謎の死亡者増加 ”

それについて語っている。

多分画面が消えたのは俺たち4人が見ているテレビだけだろう。

「早く放送をやめさせろ、さもないと」

さもないと……。

なんだよ!?

「このニュースキャスターを殺す」

え?

まって、なんだよそれ!

『いったいどういう事なのか……』

放送していたアナウンサーの綺麗なお姉さんが  
いきなり苦しみ始めた。

自分の首に手をあてている。

まるで首を誰かからつられているかのように。

でも誰も映っていない。

俺たちにはすぐ分かった……

こつくりさんが首を絞めていると。

アナウンサーの人は呼吸停止でその場に倒れた。

こつくりさんが殺してしまった。

いや……

”殺した”

アナウンサーのお姉さんは死んでいるはずなのにいきなり目を大きく開けて……

「終わらせる」

そう言って再び息を引き取った。

終わらせる？

放送を終わらせる？

それとも……

こつくりさんを終わらせる？

怖い

次は何があるのか。

考えただけでも身震いする。

俺もお前に言いたいよ。

人を殺すのは終わらせろって。

だって、こんなの酷すぎる……。

どうやったらとめられるんだ……

本、捨ててもこつくりさんがひらってくる。

水にながしても駄目だ。

こつくりさんをナイフで殺す……。

これも考えたがこつくりさんは瞬間移動ができる。

もう、本をどうにかするしかない。

本を

本を……燃やせば。

そうだ！燃やせばいいんだ！

燃やせば全部焦げる。

この本だつて……

この本があるからいけないんだ。

俺はそう思い自分の部屋に戻つて机からライターを取り出す。

終わる……

これで終わる。

これで解放されるんだ。

なんの根拠もないのに俺はそう思っていた。

さようならごっくりさん

ゲームはおしまいだ。

>>ボツ……バチバチ<<

本が燃えていく

もう全部終わる……

「何やってる」

本の前に現れたのは

”ごっくりさん”

本はみるみるうちに燃えていく。

こつくりさんは全部燃え尽きる前にページを一枚破った。

な、何するんだ!!

まあ良い

ページを何枚破ろうがもう終わるんだ。

この本事態なければ。

「ヴ……ウヴヴヴウ」

こつくりさんは苦しみ始めた。

次の瞬間……一瞬で目の玉を片方落とした。

消えていくのか？

こつくりさんが滅びるのか？

こつくりさんは俺を悲しい目で見る。

「ヴアアアアア……」

こつくりさんが壊れていく。

さよならこつくりさん

ゲームとても楽しかったよ

何人も殺しやがって。

……どうもアリガトウ

橋本 翔

こつくりさんを絶対許さない事を誓います。

これからも

こつくりさんは最後の力を振り絞って俺の首を絞める。

残念だな

俺が死ぬ前にお前が滅びるよ。

第17話：「こっくりさん、ありがとう」

「翔!!」

そう言つて光と真理と明奈が入ってきた。

「ヴアアアアアア」

皆はこっくりさんを見て驚く。

どういう事になっているのか

やはり理解できていない様子だ。

「お前……な……」

光は焦げている本に目がいったのか

怒りのあまりに俺にあたる。

「何やってんだよ」

そう言つて俺の帆を殴る。

だってこれしか方法はなかったんだ。

こつしないとかっくりさんは……。

俺はそう思いながらこっくりさんの方を見る。

もう舌は流れ落ち、目は飛び出て、口から血を吐いて髪抜け落ちた  
哀れなコツクリさんの姿をただ……見ることはできない。

「全部終わらせる条件だったろ？何で殺してんだよ」

何も答えない俺に光は涙を流しながら言う。

「私……納得できないよ」

明奈はそう言っただけ俺の方を見る。

真理も

だっただけ……。

そんな事いわれたって

コツクリさんはもう死んじゃったじゃないか。

本もこの通り焦げてカスになってるし

今更コツクリさんをしようだなんてもう遅い……

「あーこの紙、これコツクリさんの紙じゃないか？」

そう言っただけさきまで泣いて俺にガンつけてた光が紙をひらって皆  
に見せる

これ、さっきコツクリさんが破った一枚だ。



「もう一回こっくりさんをしようっ。」

そう言い出したのは明奈。

まだ可能性があるのならば……。

何かが変わるかもしれない。

もとはと言えば俺が言いだしたんだ。

ここで逃げる訳にはいかない。

皆はこっくりさんを書いて鉛筆を持ち準備している。

「はじめるよ、翔」

真理にそう言われ

涙を流しながら行く俺……。

こっくりさん

殺して置いてなんだけど

もう一度……

最後だけもう一度……

俺たちは鉛筆を強く握った。

日付が出てきて、紙もかすかだが光っている。

こつくりさんはまだ生きている。

俺たちは息を吸って深呼吸した。

「こつくりさん、こつくりさん

……おいでください」

反応がない……

こつくりさんは目もどろどろの状態だしな。

そう思ってコックリさんが倒れている所を見た。

こつくりさんが消えている。

え……？いない？

「お、おい！こつくりさんがいなー……」

俺は明奈達に声をかけた。

「俺達がこつくりさんを始めたから本の中にこのページに瞬間移動したんじゃないのか？」

瞬間移動

ページの中まで瞬間移動できるのかな。

あの体で

あんなボロボロの体で……。

俺はそんな事を思ってたら何故か涙が出てきた。

「どうしたの？」

真理は俺を心配してくれる。

何故だか分からないけれど涙が止まらないんだ。

「つ………続けて」

俺は震える声で言う。

こつくりさん呼び出さなくちゃ……。

俺は少し後悔していたんだ。

コックリさんをあんな姿にさせて。

「こつくりさんこつくりさん……居たら”はい”の方向へ行ってください」

光が真剣な顔をして言う

すると……

>>ズズズズズズ<<

鉛筆が動き出す

”ハイ”の方向へ行く

こつくりさんは生きていた。

まだ完全に消えていなかった。

俺はそう思うと心が落ち着いた。

俺たちがこつくりさんに問う前にこつくりさんは

動き始めた……

「これ　で　さ　い　ご　だ」

俺たちは体が反射的に動いた。

”これでさいご”

そう思うと悲しいようで嬉しいんだ。

いや

本当は悲しまなくちゃいけない……。

だけどー……。

「こっくりさん、さようなら」

俺はこっくりさんに涙を流していった。

本当は全部枚数終わらせたわけじゃないけど

終わり方がどうあれ最後までたどり着けたんだ……。

「ありがとうおわらせてくれて  
あんなまねしてごめん」

こっくりさんは俺たちに謝ってきてくれた。

でも

俺は許せないよ。

こっくりさんを……

でも、アリガトウ

俺もこっくりさんに教えて貰ったこといっぱいあったから……。

## 第18話：「戻った日常」

こつくりさんが誤ってくれたせいで

僕たちはこつくりさんに言うことは何もなくなってしまった。

俺たちは声をそろえてこつくりさんに別れの言葉を告げた。

「こつくりさん……さようなら」

誰もアリガトウとは言わなかった。

いや、ありがとうだなんて

言えなかったんだ。

俺たちの大切な人を何人も殺しておいて。

”アリガトウ”

だなんて……。

「こつくりさん、こつくりさん……お帰りになられるのであれば」  
「はい」の方向へ行かれてください」

鉛筆は動き出した

>>ズズズズズ<<

”はい”

終わった。

これで終わった。

これで本当にゲームが終わった。

おびえる生活をしなくてすむんだ。

俺たちはそう思うとホットした。

「おわったな……」

「うん」

「なんか……あっけなかったね」

俺たちはブツブツと呟いていた。

すると

目の前が真っ暗になった。

え……？

俺たちはどうなったんだ？

真っ暗の中で誰かが叫んでいる。

こっくりさんだ

「今までアリガトウ、本当にありがとう」

俺は喋れない……。

ただこっくりさんの言う言葉を聞くだけ。

真っ暗闇の中で何故かこっくりさんと二人だ。

光達は何処に行ったんだ？

「あんな事をしてごめん……」

こっくりさんは俺に必死で言ってくれている。

もういいよ

許せないけど

もういいから。

そう思った瞬間

こっくりさんは消えた。

そして築いたら自宅だった……。

明奈達が居ない。



何で？

さっきまで居たのに。

机の上に置いてあつた焦げた本もない。

「翔く！何やってんの掃除手伝うか、出かけるかにしなさい！」

姉がいつも通り俺に怒鳴りつける。

何で姉ちゃんがいるんだ？

ってか今日何月何日だよ！

カレンダーを見たら

” 2006年 4月5日 ”

こつくりさんを僕たちが始めた日……。

最初に戻っている。

それじゃ

こつくりさんの本は

俺はそう思い小屋に猛ダッシュで走った。

何処を探しても本がない。

終わったんだ……。

そうなんだ

こつくりさんは最初に戻してくれた。

あの世にいったのかな？

俺はあの時みたいに本屋へ行った。

俺はこつくりさんの本ではなく別の本を読む。

恋愛の小説をあの時みたいに立ち読みしていた。

「翔一君！」

後ろから驚かしてきたのは俺の女友達「宮本 明奈」(ミヤモト アキナ)だった……。

あの時と同じ……驚かしてきた。

「何読んでるの？」

「恋愛小説」

そう言っただけ二人は大声で笑う。

「こつくりさん……やっと終わったな？」

俺は明奈に問いかけた。

明奈は不思議とビックリしたような表情で

「こっくりさん……何の事？」

と言ってくる。

え？

忘れたのか？

第19話：「3人の記憶が途絶えて」

「こっくりさんだよ……ほら……」

俺が何度言っても明奈は分からない表情をしてみせる。

何で……。

何で忘れてしまったんだよ。

嘘だろ？

だつてあんな

あんな事がおきてたのに。

もしかして

俺はふと不安感に襲われて真理と光を呼ぶように言った。

何十分か後

光と真理が本屋へやってきた。

「翔〜！久しぶり」

そう言つて歌いながら言つ真理……。

俺はすぐにこっくりさんの事を言ってみる。

「あのさ、ヨカッタよな！戻って」

皆は不思議そうな表情をしてみせる。

何だよその表情

頷けよ……。

何で困ったような表情してんだよ。

「忘れたとか言わないよな、こっくりさんの事」

俺は3人を睨みつける。

あんな事があつて

それでもって忘れたとか……。

そんなのって……。

「何言つてんの？翔どうしたの？こっくりさんが何？」

明奈が馬鹿にするように言う。

「訳わかんねーよ、お前」

光も

真理も

皆忘れている。

何で俺だけ記憶を残した？

何で

>>プルルルルル……<<

俺の携帯電話に電話がかかってきた。

” 非通知設定 ”

誰だろう？

こつくりさんじゃないよな？

だって明奈達に電話は掛かってきてないし

俺は不安をかかえながら電話をとった。

「もしもし」

「翔君ですか？今あなたの学校に居るので来てくれませんか？」

高い女の人の声だった。

俺は明奈達に事情を説明してから学校に向かった

そこに居たのは……。

長い黒い髪がとても眩しく

目が大きく背はそんなに高くない。

150センチくらいだろうか。

年齢は分からないが俺たちと一緒にくらいだろうか。

「こんにちは」

女の子は高い声で挨拶をし礼をする。

この高い声何処かで聞いた事がある。

それにこの顔どこかで……

どこかで見たんだ。

「こんにちは」

俺も一応挨拶を返した。

頭の中が真っ白で誰だか分からない。

「私の事覚えてますか？」

女の子は寂しそうな顔で俺の表情を伺う。

俺はもしかしてと思って

「こっくりさん？……な訳ないよな！」

言いかけたが誤魔化してしまった。

だってそんなハズないし

「私は、季黎<sup>キサ</sup>と言います」

ご丁寧に自分の名前を紹介してきた。

季黎？見覚えがない。

誰なんだ

一瞬こっくりさんかと思ったが違ったようだ。

「えつと俺、あなたのこと知らないんですが……」

そついうと季黎さんは悲しい表情をして見せた。

え？

俺なんか言ったか？

でも、どうしても分からないんだ

「私はこっくりさんです……私の本名が季黎です」



え……。

こっくりさんにも名前があったのか？

あまりに突然の告白で俺は驚きを隠せなかった。

だって、あの……

っていつか何でここに居るんだ？

でも俺はズット疑問に思っていた事があったんだ。

「何で俺だけに……こっく……季黎さんの記憶を残したんですか？」

俺はつい”こっくりさん”と言いそうになったが慌てて言い直した。

もう”こっくりさん”なんて呼べない。

本名をしてしまったから。

「あなたがこっくりさんを始め、終わらせてくれたから……  
あなただけには私の事を覚えててほしかったんです」

季黎さんは苦笑いをした。

でも

終わらせたのは俺一人じゃないのに。

「終わらせたのは俺一人じゃ」

俺がそう言つと季黎さんは俺の言葉をふさぐようにして

「あなたがあの時燃やしてくれなかったらゲームは終わっていませんでした」

でも”終わらせよう”って言ったのは俺じゃないのに……。

俺は季黎さんの顔を見たら目をそむけて考えた。

そうだよな。

皆あの最悪な事件ゲームの事を覚えてたら今後普通に生活していけないもんな。

俺だけ季黎さんの事を覚えている。

だからあの時の事は一生忘れないで生活していく。

「記憶消しましょうか？あなたが心残りなのであれば……  
私はあなたから今まで起こった記憶を消します」

え？

何だって？

でも、そんな……。

季黎さんの思わぬ発言に俺はとまどいを隠しきれなかった



## 第20話：「壊れることのない友情を誓って」

記憶を消されたら

せつかく季黎さんと出会えたのに。

それに

「またこっくりさんを始めるかも知れない」

そうだよ。

記憶を消されたらまた最初の時みたいにこっくりさんを始めるかもしれない。

「大丈夫、あの時みたいに酷いことは起こらないから私は人間に戻れた……」

だからただの遊び半分で終わるはず。何かあったら私が助けるからだから何も苦しまないように私があなたの記憶を消します」

そう言って俺の額に指を二本当てる……

ちよつとまっつて。

何で季黎さんはこっくりさんになってたの？

記憶は消えるけどそれだけ聞かせて

「ちよつとま……」

季黎さんは何か意味不明な呪文を目をつぶって唱え始めた。

次の瞬間

目の前が真っ白になった……。

そして気づいたら学校の校門の前だった。

あれ？一体何でここに？

さっきまで明奈達と一緒に居たハズ……

「翔〜！！」

俺の名前を叫びながら走って来るのは

明奈と光と真理。

「いきなり何処かに行くからビックリしたじゃん」

そう言って3人は笑う

ああ……

飛び出したのは確かに覚えている

でも何で飛び出していったのかが分からない。

俺は何の為に飛び出して行ったんだ？

何か目的があつたはずなのにー……

「俺何しにここに来たか忘れちゃった」

真顔で言う俺に啞然とする3人。

明奈が俺にさっきの事を説明してくれた。

電話？

電話って誰から？

着信履歴を見たが今日は誰からも掛かってきていない

意味分らないー……

そう俺はこつくりさん（季梨さん）と逢っていたことなんてすっかり忘れていた。

「ま、軽い老化と言う事で！もどろーぜ！なんか飯でも食いに行こうよ……な？」

そう言つて俺の肩を軽く叩く光。

軽い老化にしては……。

思い出せないのはナンデだ？

俺はその事は気にしないことにした。

いくら悩んでも思い出そうとしても結果は同じ思い出せないから。

悩んでも無駄だと思った。

そうこうして数日が過ぎー……。

春休みも終わり学校へと入った。

だが……

こんな時期に転校生がやってくるなんて思ってもいなかった。

>>ガラガラ……<<

担任が教室に入ってきた。

続いて転校生も入ってきた。

長い黒い髪がとても眩しく

目が大きく背は……そんなに高くない。

150センチくらいだろうか。

「初めまして……竜崎季黎と言います」

お人形みたいな綺麗な声だった。

俺はその女の子に見とれていた。

席がなんと俺の隣だったのだ

「初めましてー……翔君、仲良くしてね？」

え……？

なんでコイツ俺の名前しってるんだ？

「季黎さん……えと、よろしく」

俺は驚きを隠せなかった。

隠せないなんて当たり前だ。

だって俺コイツの事知らないのにー……。

「何で俺の名前しってるの？」

季黎さんが席に着いてから俺は問いかけた。

「席……ってか名簿みたから」

そう言っつて季黎さんは俺に笑いかける。

季黎さんが転校してきて一ヶ月が経った。

今では光や真理や明奈もすっかり季黎さんと仲良しだ。



そう……。

季黎さんは今までの事を全部知ったうえで俺たちに接してくれているなんて俺たち誰一人知らない……。――

俺は季黎さんに出会えてヨカッタ。

綺麗な表情を浮かべる人と友達になれてヨカッタ。

これも一つの運命だったんだ。

ありがとう季黎さん。

僕たちは一生壊れることのない友情を固く誓った。

最終話：「明るい未来を一緒に」

ありがとうこっくりさん

俺はキミを許せなかったけど今は許せるんだ

なんでだと思っ？

こっくりさんの良い所を知って良かったから

あのまま終了しても何も変わっていなかったら俺は許せなかったと思う

だけどな

今はこっくりさんの事がスキだから

だから憎んでたこのキモチを解除します

今はお礼しか言えない

こっくりさんの事を俺達は忘れてしまったけれど

あの長いニュースにもなった事件の事を俺たちは忘れてしまったけれど

俺たちはこれからまた歩めるからこっくりさんと一緒に

今度は間違った方向じゃ無い方で

明るい未来と一緒に築いていこう

いや明るい未来と一緒に築いていけるんだ

そう信じてるから

じっくりさん、じっくりさん

僕たちに本当の恐怖を教えてくださいアリガトウ

僕たちに本当の友情を見せてくれてアリガトウ

僕たちに本当の光を与えてくれてアリガトウ

アリガトウ

アリガトウ、こっくりさん

僕たちは決して忘れない

あのときの出来事

僕たちは決して忘れない

忘れやしない

本当は最初っから

こっくりさんの事が好きだったのかもしれない

こっと思えるのは

本当のキミをしっ  
たからだよ

ありがとう季梨さん

ありがとう皆





## 解釈・季黎さんとこっくりさんのつながり

何故季黎さんがこっくりさんになっていたかというところ

季黎さんはずっと前、本物のこっくりさんを体験した。

だけど、こっくりさんを途中でやめてしまった。

途中で鉛筆から手を離してしまったのだ。

そして、その本ごと全部捨ててしまった

「ツマラナイ、腐っている」

と暴言を吐いたから

キツネの神はお怒りになった。

そして、罰として季黎さんを本に閉じこめた。

「あなたはいけない事をいいました。罰として、この本が終わるまでこの本に閉じこめます。」

この本が全部終わればあなたを解放します。

それまで罪をつぐないなさい。

こっくりさんを馬鹿にした罰です。

あなたがこっくりさんになり、人間共に罰をあたえてでもいいので、終わらせるように努力しなさい」

と……

そして季黎さんは終わらせてくれる人を何年も待ち続けた。

終わらせてくれたのが翔達だった。

そして、その本の題名が翔の家にあった「こっくりさん」だったのだ。

だから、古くから置いてあった。

キツネの神はこっくりさんに新たな力……。

瞬間移動、人を殺せる力などを授けて、季黎さんをずっと天から見守っていたと聞く。

#### 季黎さんのその後

季黎さんはこっくりさんにされた後、二度とこっくりさんを馬鹿にすることはなかった。

ただ、こっくりさんと前向きに向きってきた。

季黎さんは人間に戻った後、神社にお参りに行った。

キツネの神様の神社に……。

それが季黎さんが本を捨ててしまった場所。

季黎さんは誤った。

「今までスミマセンでした」

と……

キツネの神は笑いながら微笑んでくれたと聞く。

何故翔の家に本があったかという……

翔の家の住人がこっくりさんの本をひらって始めた

そして恐ろしくなったので、小屋に捨てて自殺したらしい……

それが季黎さんが言っていた

「自殺したよ……」

だったと考えられる。

解釈・季梨さんとこっくりさんのつながり（後書き）

本当にこっくりさんを読んで下さってありがとうございました。本当に嬉しいです

これからも、いろいろな小説を書いていくつもりなので、応援宜しくお願い致しますw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6285a/>

---

リアル・・・こっくりさん

2010年10月28日05時38分発行